
テイルズオブエクシリア～死神伝記～

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜死神伝記〜

【Nコード】

N6913X

【作者名】

白夜

【あらすじ】

一人の少女が神の手で両儀式の姿で「テイルズ オブ エクシリア」に精霊として誕生した。

彼女は神から自由に生きろと言われ、気ままに生きる事を選ぶ。

第0話 Prologue (前書き)

新しく投稿開始！

よければ読んでくださいね！

第0話 Prologue

白い――

それが、私が最初に思った事。

それをきっかけに、次々と色々な感覚が目覚める。

「…冷たい」

体を起こすと、視界一面が真っ白な雪で覆われていた。

立ち上がって周りを見渡すが、暗闇と雪原以外に何も見えない。

私は何故、此処にいる？

いや、そもそも――

「私は、誰？」

自分は誰なのか、一切わからない。

とにかく立ち上がり、自分の体を確認してみる。

白い紬に青い帯。靴はブーツ。周りに荷物は無し。

ちらりと視界に映る髪は白に近い灰色。顔は見えないけど、体つきからして自分は女である。

「…ん？」

何かないかと探しているうちに、背中側の帯の中に何か挟んでいたのを取り出す。

それは、鞘に納められた一振りのナイフだった。

『こんばんわ』

「―っ!？」

突然、背後から声をかけられた私は、咄嗟にナイフを抜いて振り返る。

そこにいたのは、自分と同じ白色の着物をきた黒髪長髪の女性だった。

『無事に目が覚めたみたいね』

「…お前は？」

私の問いに、女性は真剣な顔を見ると、名乗った。

『私は一般的に神と言われている存在。名前はありません』

「…神だって？」

私は半信半疑で、女性を睨んだまま警戒を解かずに構える。しかし、次の言葉に思わず絶句した。

『貴女は私が生み出した精霊です』

「——なっ!？」

私は、思わず構えを解いてしまった事にも気づかずに目の前の神と名乗った女性に詰め寄る。

「どういう事だ!？ 私は人間——」

『いいえ、貴女は人間ではありません』

神の言葉に、私は再び言葉を失う。

「でも、私には人間としての知識がある。これをどう説明するつもりだ？」

そうだ、私には人間としての知識がある。今、私が話している言葉も日本語だ。なら私は日本人で——

『それは、私が日本人の魂を元に貴女を作ったからです。最低限の

知識はありますが、それだけです。個人に纏わる記憶は消してあります。実際、貴女は自分が何者なのかわからないでしょう?」

思わず息を呑んだ。

「私は…本当に人間ではない?」

『そうです。貴女は私が実験で作り出した精霊です。それに、この世界は貴女の元になった魂がいた世界とは違う世界です』

私は掴んでいた彼女の服を離すと、呆然と立ち尽くしていた。

『理解していただけましたか?』

「……一応」

本当は理解してはいないのだが、無理矢理にも理解しなければ狂ってしまいそうだった。

『では、話を進めます』

彼女の言葉に頷いて肯定を示す。

『貴女は、私が新たな生命の創造を行うにあたっての実験で生まれた精霊です。』

貴女は、私が生み出した初の人間以外の生命となります。

初めての試みでしたので、貴女が元々いた世界の亡くなった人間の魂を元に作りだしました。結果は——まあ、貴女自身が証明です。貴女にとっては、世界を越えた輪廻転生と言ったところでしょいか…』

私は、どうやら異世界に神の手で新しい生命として誕生したようだ……しかも人外に。

「質問だ。 さっき私は精霊だと言ったな。 なら、この世界には精霊がいるのか？」

『はい、います。 この世界の名は“リーゼ・マクシア” 人間と精霊が共存している世界です』

その後、私は詳しくリーゼ・マクシアの仕組みを覚えてもらった。

人間の脳にある「^{ゲート}霊力野」と呼ばれる器官から「マナ」と呼ばれる世界の根源エネルギーを精霊に与え、精霊は見返りに術を発動させる。これが「精霊術」であり、この世界では一般的な技術であるという事。

精霊は特別な方法で実体化しなければ、普段は目に見えない存在である事。

そして、そんな精霊達を束ねるのが、主である元素の精霊マクスウェルである事。

さらに、この世界の外には「^{シエル}断界殻」を隔てて、エレンピオスという世界がある事。

エレンピオスの存在をリーゼ・マクシアの人々は知らないという事。

その他には細かい知識等…。

「…ふーん、大体は理解した。それで？ 私は何をすればいい？」

話を聞き終えた後、私は彼女に問いかける。私を生み出したからには、何かしらの命令等があるに違いない。

『自由に生きなさい』

「……は？」

しかし、彼女の口から出た言葉は“自由”だった。

『実験とはいえ、私が勝手に貴女の魂を使った。それに対するせめものお詫びよ。——この世界で、自由に生きなさい』

そう言って、彼女はゆっくりと、空へと昇っていく。

「あ、おい！　せめて私の前世の名前とか教えろ！　もしくは新しい名前をつけろ！」

本当は文句を言いたいはずなのに、私の口は自然とそんな事を口走っていた。

『…貴女の名前は前世のもの。生まれ変わった貴女には新しい名前が必要よ』

彼女はそう言うと、私に首飾りの様な物を投げ渡した。

『それを着けていなさい。さっき話したりリアルオーブよ』

投げ渡された首飾りには小さな水晶がついていて、中には小さな花の蕾があった。

『それから、貴女の名前だけれど…その身体モデルになった子の名前を貰うとしましょう。貴女の名前は——シキよ』

「…シキ」

それが私の名前……。

『それじゃ、さよならよ。元気でね』

「——あ」

私がぼんやりとしている間に、彼女は行ってしまった。

「……………」

私は見上げていた空から、自分の両手へと視線を戻す。

「…シキ、か」

名前のモデルは前世の記憶にある。

『空の境界』の主人公、「両儀式」である。

彼女をモデルに作るなんて、いい趣味をしていると思う。
それなら、私は式の名を借りよう。

——私はシキ。

——死を司る精霊だ。

とりあえず、肉体は一応、人間のものを使って実体化しているようだし、あの魔眼が使えるか、私を囲む山賊らしき人間達で実験してみるところ。

「オレは死の精霊。……いくぞ——生きているのなら、神様だって殺してみせる」

人物紹介（前書き）

おおまかなキャラ設定。

人物紹介

『名前』

・シキ

>i33051—2130<

『年齢』

・?

『性別』

・女

『身長』

・155cm

『種族』

・精霊

『属性』

・闇

『耐性』

・闇、風

『弱点』

・光

『装備』

「武器」

- ・ミスリルナイフ

「頭防具」

- ・なし

「体防具」

- ・白の紬

「装飾品」

- ・ファインブーツ

『技』

「双ね鐘楼」

- ・敵に接近しつつ、高速でナイフを振る技。最後に敵を小さく打ち上げる。

「無名の月」

- ・小さくジャンプしながら鋭い一撃で前方の敵を切り付ける技。敵をダウンさせる事ができる。

「虎落笛」

- ・敵を斬りつつ、背後に回る技。技の出が早い。

「陰陽螺旋」

- ・姿勢を低く構え、敵の攻撃を受け流しつつ反撃するカウンター技。打撃と精霊術で受け流し方が違う。

「玻璃の月」

・小さくジャンプしつつ、満月を描く様に回転斬りを放つ。ジャンプ中も発動可能。

「隠しナイフ」

・ナイフを投げる遠距離攻撃。牽制や、敵の詠唱を妨害するのに役立つ。

「魔神剣・瞬牙」

・ナイフを振り抜くと同時に剣圧を飛ばす技。スピードがかなり速い。

「月閃光」

・三日月を描く様に敵を連続で斬りつつ、上空に打ち上げる技。連続ヒットするので、ガードブレイクを狙える。

「碎月」

・力を籠めた回し蹴りで敵を吹き飛ばす技。射程が短い、ガードを崩す効果がある。

『奥義』

「直死の魔眼・七景終落」

・擦れ違い様に敵の死の線を斬り、ダウンさせる技。ガードをしていてもダメージを軽減できない。

『秘奥義』

「空の境界・斬」

・精霊の力を集めた刀を作り出し、一太刀の下に切り捨てる技。ヒット数は少ないが絶大な威力がある。

> i 3 3 0 5 3 — 2 1 3 0 <

『特殊スキル』

「転猫」

・敵の攻撃をタイミングよくバックステップで回避すると、カウンターで斬りつける特殊技。

「残月」

・「共鳴」^{リンク}している時に敵がダウンしたら、ナイフを突き刺して追撃する。一定の確率で敵を一撃で倒す事がある。

「直死の魔眼」

・アピールを行うと、一定時間攻撃力が1.5倍になり、一定の確率で敵を一撃で倒せる様になる。

『キャラ紹介』

神によってリーゼ・マクシアに死を司る精霊として転生した少女。生前の記憶はあるが、身の周りの環境や世界的な知識のみで自身の名前や姿等の記憶は失われている。

ちなみに、生前の死因は事故死である。

神が新しい生命の創造を行うにあたって作り出された実験体で、初めての成功例。

見た目は『空の境界』の主人公、「両儀式」の姿をモデルにしているが、モデルとなっている式より若干背が低く、髪の色も白に近い灰色となっている。

神から自由に生きろと言われ、モン高原の真っ只中に放り出され

る。よって、神様には感謝しているが、次に会ったら一回殺そうと
考えていたりする。

性格は両儀式の言動やイメージを無意識に使っているので、口が
悪く、ぶっきらぼう。しかし、どこかで他人との触れ合いを求めて
いる。ツンデレ。

一人称も「オレ」になり、「私」と使うのは心の中か、素の自分
が出た場合のみ。

身体は人間と変わらないが、あくまでも実体化の為であり、精霊
である事には変わりはない。熱い、冷たい、といった感覚はあるが、
寒さや暑さを殆ど感じず、食事や睡眠も必要ない。

怪我也普通の人間に比べれば早く治る。

『彼女の直死の魔眼』

彼女は肉体こそ両儀式をモデルにした精霊だが、魂はいたって普通
の人間である。

先天的な体質と「」に触れた事により覚醒した両儀式や、七夜
の一族の『淨眼』が臨死体験で「根源」と繋がり、脳が死を理解し
た事により直死の魔眼へと進化した遠野志貴とは違う。

シキは死んだ後、神により魂を拾われ、長い間実験の為に神と共
にあった。

その過程で、肉体から解き放たれた魂が、自らの死を理解してい
た事、そして「神」という高次元の存在と長い時間を共にした事
により、物事の成り立ち、生命の理を無意識に理解した。

それらが物事の始まりと終わり——つまりは生と死を理解する事
に繋がり、彼女は知らぬ間に直死の魔眼を開眼したのである。

シキの魔眼は、自らが生命創造の実験体だからか、物事や生命の
成り立ちを脳が理解している為、主に生物殺しに特化している。

しかし、神が与えた「両儀式」と同等の器や、精霊としての感覚の強化により視覚化にも特化しており、概念、空間、時間さえも殺す事ができる。所謂ハイスペック。

第1話 雪原に咲く紅の花（前書き）

質問等ございましたら感想にて受付ます！

第1話 雪原に咲く紅の花

「アルヴィン Side」

それは偶然だった。

表では傭兵として、裏ではアルクノアの一員として働いている俺は、シャン・ドウの商人からの依頼でモン高原に素材を探しに来ていた。

モン高原はシャン・ドウとカン・バルクの間位置する高原で、年中雪が降っている極寒の雪原だ。

この高原に住む魔物は、大抵が厚い毛皮や鱗で覆われているので、防寒着の素材としてよく使われる。

俺は目当ての素材を入手し、シャン・ドウへと帰るところだったのだが…。

「…ん？」

突然、視界に映っていた魔物達が慌てる様に走り出し、一斉にいなくなった。

魔物は人間と違って気配に敏感だ。大気中に存在する精霊達の動

きから周囲の状況を瞬時に理解し、外敵から身を守っている。

人間も「^{ゲート}霊力野」からマナを精霊に与え、精霊術を使ったりするが、魔物の様に本能的に精霊を感じたりはできない。

と、言っても、俺には「^{ゲート}霊力野」がないので、どのみち解らないんだが…。

とにかく、魔物が逃げ出したという事は、近くに大きな力を持つ何かが現れたということだ。

俺は近くの岩の裏に隠れて辺りの様子を伺う。

傭兵として生きてきた経験から、このような場合には隠れて一旦様子を見るのが一番いい。

もし巨大な魔物でもいた場合は通り過ぎるのを待つか、動かないなら、移動するまでカン・バルクで待たなくてはならない。

なんにしろ、とにかく原因を見つけない事には始まらない。

——そんな時だった。

空が、一瞬で闇に包まれた。

「……な、何だ!？」

初めての光景に思わず空を見上げる。

夜が長い夜域のイル・ファン周辺ならともかく、このモン高原が昼間なのに暗くなる筈がない。

靈勢の異常か、それとも他に原因があるのか、判断に迷った俺は、とにかくモン高原を離れようと急いで立ち上がる。

幸い、シャン・ドウ側に近い為、全力で雪原を走り、シャン・ドウに続く洞窟通路を目指す。

そして、その途中、俺は見た。

雪原のど真ん中に、一人の人間が立っていた。

小柄な身体を包むのは見たことがない雪の様に白い服。

髪は白に近い灰色で、こちらに背を向けているので顔はわからない。

身長も低めで、子供のようだが、どこか不思議な感じを覚える。何より、この雪原にあんな薄着でいるにも関わらず、寒さを感じていないのか一切震えていない。

そして、その人物は何かに気がついた様にこちらに振り返る。

——ゾツとした。

こちらに振り返った顔は中性的で、男にも女にも見える。体つき

からしておそらく女なのだろう。

しかし、俺が恐怖したのは、その無表情な顔でもなければ、手に持つ“血まみれ”のナイフでもない。

彼女の“蒼く輝く眼”だ。

その眼には一切の感情は無く、こちらを観察しているかの様にじっと見てくる。

「——へえ、あんた、面白いな」

彼女の眩きにハッとして武器を構える。

右手に大剣を、左手には銃を持ち、いつでも動ける様に足を開いて姿勢を低くする。

「ん？——なんだ、やるのか？オレはやりたくないんだけど」

彼女は呆れた様にそう言うと、ナリフを振って付いていた血を落として鞘に納める。

そこでやっと、俺は彼女の足元にある物に気づいた。

——紅だ。

ただ、ひたすらに紅かった。

散らばる手足、切断された武器や防具。

人間だったモノが無造作に転がり、彼女を中心に白い雪を紅く染めていた。

「それは——お前がやったのか？」

俺の問い掛けに、彼女は興味が無いと言わんばかりに足元の死体を見下ろす。

「ああ、こいつら？山賊みたいだな。オレを襲ってきたから反撃した…。正当防衛だろ？」

それよりも、と言ってこちらを見る彼女の眼は先程とは違い、白い服に反するかのような黒になっていて、もう恐怖を感じる事もなかった。

ゆっくりと、足元の死体を意に解さず、少女は歩み寄ると俺を見上げてきた。

こうしてみると、本当に小柄だというのが顕著にわかる。

しかし、そんな俺の思いは次の言葉であっさりと吹き飛んだ。

「——お前、こちらの……リゼ・マクシアの人間じゃないな？」



「シキSide」

実感がない、というのはこういう事なんだ、と私は思う。

私を囲む山賊であろう男達は、私が忠告しようと口を開く前に武器を持って襲い掛かってきた。

私を囲む様に迫る彼等を見据えながら、私はゆっくりとナイフを抜くと、一番近い男を視る。

左足と右肩から脇腹にかけて、そして武器を持つ右腕に赤黒い“死”という切断面が見えた。

ナイフを持つ腕が自然に動き、下から振り上げる形で右腕を切断

する。

バランスを崩した男に一步近付き、右肩から左の脇腹にかけての線も切断する。

それだけで、その男の身体は生命活動を停止し、真っ赤な血を撒き散らしてずり落ちて有無を言わぬ肉塊と化した。

そのまま振り返りつつ、背後から迫る二人目が振り下ろしてきた武器を根元から切断する。

驚愕に目を見開く男の胸元にある線を同じ様に切断して、男が倒れる前にその死体を蹴り飛ばす。

残りの人数は四人程度、私は人を殺したという実感すら湧かないまま、数秒で残りの山賊を全て殺していた。

——実感がない。

その場に佇み、ただ前を見ながら思考する。

記憶にある知識からして、おそらく私は普通の人間だった。

その私がこうして殺人という、非日常的な行いをしたというのに、全く心が動かないというはどういう事なのか…。

考えても仕方がない、と苦笑いをしながら、これからどうするかを考える。

そんな時、背後から気配を感じて振り返った。

そこにいたのは一人の男。

身長は180cm前後で、右手に大剣を、左手には銃を持っていた。なかなか良い顔立ちで、茶色のコートと首に巻いた高そうな黒いスカーフが男の雰囲気合っている。

警戒しているのか、こちらの動きを見逃さない様にしつつ、いつでも動ける様にしている。戦闘慣れしている、とも言えるだろうか……。とにかく、先程の山賊達の仲間じゃないみたいだ。

しかし、そんな事はどうでもいい。

私が興味をそそられたのは、彼を視た時に感じた違和感。

先程の山賊達には有ったのに、この男には何かが無い。

生命の成り立ちと、視覚化に特化した私の魔眼は男の脳の一部が先程の男達と違うのだと瞬時に理解する。

そうだ、この男には「^{ゲート}靈力野」が無い。つまりはリーゼ・マクシアの人間ではなく、エレンピオスの人間という事になる。ちよつとした興味から、私は男に声をかける事にした。

「——へえ、あんた、面白いな」

それが後に、私の生活を決める事になるなんて思わなかったけど。

——既に空に闇は無く、曇った空からは絶えず雪が降り続いていた。

第2話 傭兵と精霊（前書き）

原作に関わるのは次からです。

第2話 傭兵と精霊

「アルヴィン Side」

「ありがとよ、助かったぜ」

笑顔の依頼人から報酬を貰い、俺はその場を離れる。

依頼を達成した後、長くその場に留まると色々と目をつけられる事があるからだ。

シャン・ドウの街中を適当に歩き回りつつ、消費したアイテム類を補充する。

アップルグミやオレンジグミは使い勝手がいい割には値段も安い。傭兵には欠かせないアイテムだ。

一応、ライフボトルも常備しているが、使う場面は無いだろう。

彼女が戦闘で負けるところなんて想像できない。寧ろ、俺が使われる側になる可能性の方が高いだろう。

そんな事を考え、溜息をつきながら宿屋に入ると、現在宿泊している部屋に向かう。

階段を昇った先にある三つの部屋の左側の部屋が“俺達”の使っている部屋だ。

ドアを開けて中に入ると、ベッドの一つに腰掛けた彼女がこちらに視線を向ける。

「ああ、アルヴィンか……おかえり、依頼はもう終わったのか？」

相変わらずの白い服（キモノと言うらしい）に身を包んだ少女――シキはこちらを向いたまま、足をぷらぷらとさせながらそう言った。

「おう、案外簡単な依頼だったからな。お前も来ればよかったのに」

「簡単な依頼について行っても暇なだけじゃないか。オレは無駄な事はしないタチなんだ」

じゃあ、宿屋でごろごろしてるのは無駄な事じゃないのか、と危うく言いかけた俺はその言葉を寸前で飲み込んだ。

「そうかい。……じゃあ、今後の話でもするか。一応、明日にでもこの街を離れるつもりだからな」

ああ、と言いつつ、背伸びをしながらシキは椅子を引いて俺と向

かい合う形に座ると、右手をテーブルの上に立てて顎を乗せる。

こんな風に、俺とこいつが話をする様になるなんて、最初は夢にも思わなかったものだ。

あの日——血で真っ赤に染まった雪原の一角で、俺とシキは出会った。

ハッキリ言えば、シキは不思議な奴だった。

ナイフ一本で防具ごと山賊達をバラバラにした挙げ句、俺がエレンピオス人であることを一目で見抜いた。

本人は、視れば解る、なんて言っていたが、リーゼ・マクシア人とエレンピオス人は「^{ゲート}靈力野」が有るか無いかの違いしか見分ける方法がない。どちらにしろ同じ人間だからだ。

しかし、シキは見ただけで細かな違いを見抜いてしまう。本人に聞いてみたが、「オレはそういうのを見分けるのが得意なんだ」と、言われたつきり曖昧な返事しかない。

俺は、おそらくだが彼女の目に秘密があると思っている。

雪原で一度だけ見た、あの蒼い瞳。あれに生物の細かい部分を見分ける力でもあるのだろうか。

結局、あの後、シキはこちらの質問をのりくらりと曖昧な答えで濁し、いつの間にか俺の泊まっている部屋に強引に押し入ってきた。

シキには羞恥心とかがないのか、と最初は思っていた。仮にも間

違いが起きないとも限らないからだ。

注意する意味で、一緒の部屋で寝ても大丈夫なのか、と聞くと、本人は至って真面目な顔でこう返してきた。

「なんだ、オレの体に興味があるのか？物好きなやつだ。

でもまあ、もしもの時は反撃するさ。　オレは武器を持たなくてもお前を殺すなんて簡単だぜ？」

そんな風に言われると、シキに関する事には殆ど諦めがついてしまった。

しかし、慣れとは恐ろしいもので——俺とシキが出会ってから既に一週間が経過しているが、今はお互いに普通に会話する程の仲になっている。

今まで独りで世界中を渡り歩いてきたが、こうして同じ部屋に誰かと二人で長い期間一緒にいた事はない。

シキはぶっきらぼうで掴み所がない様な奴だが、こちらの質問には答えるし、シキの方から話題を振ってくる事もある。

はつきり言えば、シキとの生活は楽しいと言える。

一人じゃ厳しい依頼にはついて来て手伝ってくれるし、討伐の依頼では今だにかすり傷すら負った事がない程の強者だ。

見た目は小柄な少女だが、皮膚が固く、体の大きい魔物でさえもあっさりと倒せる程の力を持っているのだ。

武器であるナイフに秘密があるのか、シキ自身に何か秘密があるのか——今だにわからない事は多い。

シキが俺を気に入る理由は解らないが、彼女が何者かわからない以上、必要以上に気を許す事はできない。

だから街を移動する時、彼女がどうするかを聞いてみる。

「オレはお前についていくよ。知り合いもないし、何より——お前は面白いからな」

この答えが当然である、という様に、シキはあっさりとそう口にした。

予想できなかった答えではなかったので、こちらも了承した。そして、次の日の朝に出発という事にして、今日はもう休む事にした。

こちらに背を向けて眠るシキの背中を眺めながら、俺は昼間に受け取った指令を思い出す。

指令の書いてある紙には、『マクスウェルが動き出した。至急、イル・ファンに向かい、動向を探れ』と書かれていた。

俺が所属している組織——アルクノア。

二十年前、事故でエレンピオスからリーゼ・マクシアに流れ着いた者達で成り立つ組織。

アルクノアの目的は、リーゼ・マクシアとエレンピオスを隔てる「断界殻^{シェル}」を管理している精霊の主——マクスウェルを抹殺し、エレンピオスへと帰還すること。

これが一応の目的とされているが、俺からすれば、最近はどうも活動内容が過激さを増している様な気がしてならない。

と、言うのも、俺達エレンピオス人には「^{ゲート}靈力野」が無いので、必然的に精霊術が使えない。

そんなエレンピオス人が使う「^{ゲート}靈力野」を使わない兵器——それが「^{ジン}黒厘」である。

ただ、「^{ジン}黒厘」は作動させた時に周囲の微精霊達を殺す。

マクスウェルはおそらく精霊達が死んだ事を感じたんだろう。だからその原因があるイル・ファンを目指す。

イル・ファンはラ・シュガルの王都。

アルクノアの指導者、ジランドが潜り込んでいる場所でもある。

ジランドとの仲は悪いが、これもエレンピオスに帰る為だと考えれば——まあ、多少は我慢できる。

しかし——いや、駄目だ、どうしても思考がネガティブな方向に向かっちゃまう。

「∴外の空気でも吸うか」

俺は音を起てないように忍び足で部屋を出た。



アルヴィンが外に出た後、私はベッドから体を起こした。

私は体は人間だが、一応精霊だ。睡眠や食事等には必要ない。意識すれば眠れるし、食事もとれるのだが、それらは余程の事がない限り行わないだろう。

私は死を司る精霊だ。

死は世界中に満ちている。

人間は言うに及ばず、虫にも、魔物にも、精霊にだって死は訪れる。

私はそんな死を触媒にしてこの世界に実体化している。マナは器である体が生成しているのです、世界中の生命が死滅しない限り、私自身が消える事もないだろう。

——閑話休題

枕元にあるナイフを取り出すと、目の前に翳してみる。

ナイフ自体は普通のナイフだ。ただ、妙にしつくり手に馴染むのが気になる。

まるで、昔から使っていたかのように。

そもそも、私は戦闘経験など全く無い。

なのに体が勝手に動く。これが一体何故なのか解らないが、知識に無くても体が覚えているという感じだった。

それに、近くに丁度良いお手本となるアルヴィンもいる。

私と違い、パワータイプであるアルヴィンの攻撃は私と正反対だ

が、学ぶ事が多い。魔物の動きに合わせた攻撃や防御、回避の方法をアルヴィンから見て学んでいる。

しかし、そのアルヴィンも心に深い闇を抱えている。

自分の生まれた世界とは別の世界に二十年も放り出され、裏の仕事も沢山こなしてきたのだろう。

私と話している時も一切油断していない。必ず手の届く場所に銃を置いているし、何より私を常に観察し、私の秘密を探っている様子が長い間傭兵生活をしている事を感じさせる。

へたに馴れ馴れしくされるより、余程安心できる。山賊がいる様な世界だ、親しくしたと見せかけて一突き、なんて事もある。

それが私の何かの琴線に触れたみたいで、何と言うか――捨てられた猫の様な印象を受けるのだ。

猫にしては、かなり体格が大きいけど…。

「ふふ、何を言ってるんだか、私は…」

思わず笑ってしまった自分に少々驚いた後、アルヴィンが戻る前に再びベッドに横になる。

明日は何かがある気がする。多少は休んでおいた方がいいだろう。

そう思いながら、私は意識を闇に沈めていった。

第3話 直死の魔眼（前書き）

原作入ろうとしたらもう一話かかりました（汗）

第3話 直死の魔眼

「シキSide」

一晩の休息の後、私とアルヴィンは出発前に少し体を動かしておこうという事になり、シャン・ドウの人気のない路地に移動していた。

「うっし……。ここでいいだろ」

アルヴィンは適当な広さのある広場の真ん中に立つ。朝早いからか、周りに人はいない。

「さて、俺達は今日、イル・ファンに向かうわけなんだが……。二人での旅ってのは結構厳しいこともあるだろう。」

だから、そろそろ「共鳴^{リンク}」を使った連携を練習していた方がいい」

「共鳴^{リンク}」とは、リアルオーブを通して仲間の意識を感じとり、連携攻撃やサポートを行いやすくする技法である。

神から貰ったリアルオーブを目の前に持ってくる。

中に見える蕾はだいぶ開いて、完全に開花する寸前だった。

「リリアルオーブの事や「共鳴」^{リンク}についての説明はあるか？」

「いや、大丈夫だよ。知識としてはちゃんと知ってる」

「そうかい……。じゃあ、まずは適当に的を作っておいたから、それを使って『共鳴術技』^{リンクアーツ}の練習だな」

アルヴィンは荷物の中から藁で作った人形を取り出すと、私の横に並ぶ。

「んじゃ、まずは「共鳴」^{リンク}を繋ぐぞ」

リリアルオーブから青い小さな光が出てアルヴィンと繋がる。
アルヴィンからは、「人形に対して左から回り込む様に移動する」という意思が伝わってきた。

この世界の魔物への一般的な対処の仕方は、挟み撃ちである。よって、私はアルヴィンとは反対の右側へと移動する。

「よし、いくぞ！」

アルヴィンが右手に持った剣を人形に叩きつける様に振り抜く。
多少の重りが入れているのか、人形は地面から50cm程浮いた

所で一瞬、停止する。

「シキ！！」

アルヴィンの掛け声と同時に、落ちる人形を蹴上げて更に上へと浮かし、ナイフを構えて跳び上がると、腹部の辺りに突き刺し、地面へと叩きつける。

そして、アルヴィンから攻撃するという意思を感じたので素早く一歩後に下がると、倒れた人形にアルヴィンがとどめとばかりに剣を振り降ろした。

時間にして、約3秒程の出来事だった。

「うっし…、連携は上手い具合にできたな」

「なあ、アルヴィン。「共鳴」^{リンク}する重要性はわかるけど、オレは普通に斬った方が早いぜ？」

私の言葉にアルヴィンは溜め息をつく、私に呆れた様な視線を向けてきた。

「あのなあ、いつでもおたく一人で戦いきれる訳じゃないだろ？一人じゃ限界もある。今は平気かもしれないけど、やっておいて損はないと思うぜ？」

「ふーん、そんなもんなのか？」

アルヴィンから更に深い溜め息が聞こえたけど、私は無視して新しい人形を取り出して準備する。

「んじゃ、次は『共鳴術技』^{リンクアーツ}の練習だな」

先程とは違ってアルヴィンの隣に並ぶ。人形へと視線を向けて意識を集中し、アルヴィンと同時に行動を開始する。

「いくぞ！」

「そらっ！」

アルヴィンの『魔神剣』と私の『魔神剣・瞬牙』を合わせて巨大な衝撃波を作り出す。

「『魔神剣・龍牙!!』」

衝撃波自体は巨大だが、スピードも速く、威力も高かった。当たった人形が粉々になったのだから間違いない。

「へえ、中々面白い技ができたな」

アルヴィンも満足そうに剣を仕舞ったので、私もナイフを帯の裏にある鞘に納める。

一対一の戦いに特化している“式”の戦闘方法からすれば、こういった連携も後々大事になるだろう。先程のアルヴィンへの反論を思い出し、少し反省だ。

「よし、じゃあ、そろそろ出発の準備に——アルヴィン？」

振り返ってアルヴィンへと声をかけるが、彼は険しい顔で目を閉じたり開いたりしていた。

「アルヴィン？　どうかしたのか？」

「い、いや……。なんかおかしくてさ」

「……?」

アルヴィンは周りを見渡すと更に顔を険しくする。

「なんだ、こりゃ……。線が沢山見える」

「——っ!?!」

私は反射的にアルヴィンの肩を掴んだ。
驚いた顔をしているアルヴィンの瞳を覗き込む。

「線…だと？ お前も直死の魔眼を使えるのか！？」

しばらく私の態度に驚いていたアルヴィンだが、珍しく慌てた様に私を引き離れた。

「ま、待て待て、落ち着けよ！！ だいたい、直死の魔眼ってなんだ！？」

私はアルヴィンの動揺を「共鳴^{リンク}」から感じ取り、とりあえず気持ちを落ち着ける為に軽く深呼吸する。

アルヴィンは周りを見ては落ち着かなさそうにしている。
おそらく、今まで見えなかった“線”が見えて戸惑っているのだ。

しかし、何故？――

アルヴィンはさっきまではいつもの様に振る舞っていた。なのに、突然『死の線』が見える筈がない。何か原因が――

私が思考する時の癖で視線を下げた時、首にかけていたりリアル

オーブが目にとまった。

リアルオーブ？

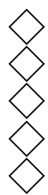
っ、そうだ、「共鳴^{リンク}」だ！！

私はすぐにアルヴィンと繋げたままだった「共鳴^{リンク}」を切る。

「アルヴィン、まだ線は見えるか？」

「いや、急に見えなくなっちゃった。：何だったんだ、あの線は？」

私は、一度宿屋の部屋に戻ってから話をするアルヴィンに言うて、二人で宿屋へと戻った。



部屋に戻った私達は、椅子に座るとテーブルを挟んで向かい合う。

「：で？ シキはあの線について何か知ってるのか？」

アルヴィンの問いに、私は頷くと、ナイフを取り出してテーブルの上に置いた。

「まずはあの“線”の正体からだ。簡単に言うと、あれは物の“死”が線となって視覚化されたものだ」

「物の……死だと？」

私はテーブルの上のナイフを弄りながら頷く。

「万物には全て綻びがある。人間は言うに及ばず。物にも大気にも——時間にだってだ」

私は自分の目を指差しながら続きを話す。

「オレの目はね——モノの“死”が見えるんだ。それがオレが持つ魔眼——“直死の魔眼”だ」

アルヴィンは一瞬考える様な仕種をした後、再び顔を上げた。

「モノの死が見えるっていうのは解った。それがあの線だって事かな……だが、それが一体何になるんだ？」

「あの線を斬れば——そいつは死ぬんだよ」

「なっ…マジかよ!？」

私は頷いて、テーブルの上に先程外から持ってきた拳程の大きさの石を置いた。

それをナイフで軽く切り付けるが、傷が付くだけで終わった。

「普通、こうやって石を斬っても簡単には斬れない。——だけど」

私は目の前の石の死を視る。

そして、見えた線をなぞる様にナイフを動かすと、石は簡単に真っ二つになった。

アルヴィンが息を呑むのを感じながら、私はナイフをテーブルに置く。

「この魔眼を使えば、こんな風に簡単に斬れちまう。力なんていない。死の線さえ見えるなら、オレに殺せないものなんてないよ。そう——」

——生きているなら、神様だって殺してみせる。

その言葉に更に息を呑んだアルヴィンだったが、なんとか持ち直してテーブルの上の石を手取る。

切断面は綺麗で、とてもナイフ一本でやったとは思えない程だ。

「じゃ、じゃあ……俺もお前みたいになんか事ができるのか？」

「それはわからない。そもそも、この魔眼は使いたくて使える様な代物じゃない。万物の死を理解しなければいけないし、無理矢理に視ようとすれば脳が負担に耐えられない。

この眼を使えるかは、完全に先天的な体質や相性の問題だ。

おそらく「共鳴^{リンク}」したことで一時的にオレの視界情報がそっちに伝わったんだ」

その後、試しに「共鳴^{リンク}」したアルヴィンが石の線を斬ってみたが、石は斬れなかった。

つまり、死を理解していない者にはただの線だらけの光景が見えているだけなのだ。

こうして、「共鳴^{リンク}」による意外な効果を見つけた私達は、予定よりも少し遅れてシャン・ドウを出発したのだった。



『スキット』

「どこまで見える？」

アル「なあ、もしかして、その魔眼を使って俺がエレンピオス人だ
って見抜いたのか？」

シキ「ああ、そうだ。オレの眼は視覚化にも特化してるからな。見
ただけで大抵の事はわかるんだ」

アル「へえ…、どこまで見えるんだ？　もしかして、服の中だけ盗
み見たりも…」

シキ「馬鹿だろ、お前。まあ、確かに男なんだから興味はあるかも
しれないけど、お勧めはしないよ」

アル「へえ、なんで？」

シキ「都合よくいく眼じゃないんだ。お前、死の線だらけの体を見
て、楽しいのか？」

アル「線だけを消す事はできないのか？」

シキ「だから、そこまで都合のいい眼じゃないんだよ。女の裸がみ
たいなら、彼女でも作るんだな」

アル「俺は別に女の裸が見たいなんて言ってないぜ？　懷に武器で
も仕込んでる奴がいるかもしれないから見えたら便利そうだな」
って思ったんだよ」

シキ「……………」

アル「いやいや、おたくも結構そっちの方の話に興味が――」

シキ「…殺す」

アル「ちょ、おまつ！？お前が言うとお洒落にならないから！！
い、俺が悪かったからナイフを抜くなって！！」
お

第4話 イル・ファンにて(前書き)

やつと原作開始！

第4話 イル・ファンにて

「シキSide」

魔眼の説明が終わって、私達は早々に宿を出ると、ラコルム海停を目指して街道を進んでいた。

道中で襲って来る魔物で「共鳴」^{リンク}の確認や、練習をしながら問題無く海停に到着し、船に乗ってイル・ファンを目指す。

夕日に照らされながら、私はぼんやりと地平線を眺めていた。

考えていたのは今後の事だ。

正直なところ、マクスウェルに会うのは気が引ける。

精霊の主と言われる程だ。私が精霊であることなど、簡単に見抜いてしまうだろう。

私は本来、この世界に存在しない精霊だ。その私がマクスウェルに接触するとなると、どうなるかわからない。

四大元素を司る四大精霊がバランスを保つこの世界において、私はバランスを崩しかねない存在だ。

最悪の場合、出会った瞬間に戦闘になる可能性もある。

そうなる——私はともかく、アルヴィンも巻き込まれる可能性が出てくる。

そのためにも、私の正体を教えるか否かを決めかねているのであ

る。

何れはばれる……しかし、できれば私の事は知られない方がいいのも事実だ。

アルヴィンが所属している「アルクノア」は強力で巨大な「黒^{ジン}厘」を使う為に、マナを集めているとも聴いた。

マナの塊である精霊の私は、絶好の標的になる可能性が高く、そうしなければただでは済まなくなってしまう。

私は溜め息をつくとき、目を閉じてただ風を感じる。

せめてイル・ファンに着くまでには答えを出さなければ……。

そう思った私は、次の瞬間、周囲の空気がガラリと変わったのに気が付いて目を開け、顔を上げる。

先程の美しい夕日は無かったが、それに負けない程の星空が広がっていた。

「夜域に入ったか……」

夜が長いという夜域の海域に入った事がわかり、私は手を握りしめると、アルヴィンいる船室へと向かった。



部屋に入ると、アルヴィンは銃の手入れをしながら目線だけをこちらに向けると、再び銃へと戻した。

「よう、何処に行ってたんだ？」

「別に、少し海を眺めてただけだよ」

「そうかい…」

それっきり二人の間に会話は無い。

しん、と静まり返った室内に、微かに波の音や、アルヴィンが銃の手入れをする音だけが響く。

「——なあ」

「——ん？」

そんな中、私は勝手に口を開いていた。
アルヴィンは手を止めてこちらに振り返る。

「お前、オレのこと、どう思う？」

「――は？」

再び沈黙した室内で、私は口を開けて呆然としているアルヴィンと視線をぶつけていた。

数秒の間、アルヴィンは固まっていたが、はっ、とした様に額に手を当てると、目を閉じて溜め息をついた。

その顔が、何故かちよつと不快に感じて、思わず表情を陰しくする。

「何だよ。そんなにオレが言った事は変な事だったか？」

「ああ、すげえ変な事だったよ」

アルヴィンは銃を近くのテーブルに置くと、私の方へと向き直った。

先程と違って何やらニヤニヤとしながら、私をじろじろと上から下まで眺める。

「まあ、俺からすればお前はかなり可愛い部類に入るよ。白い服も清楚な感じがするしな。でも、あえて言うなら薄着過ぎるから、あと一枚上に何か羽織れば――」

「お、おい、待て。オレは別にそういう事を聞いてるんじゃない！

！」

突然何を言い出すかと思えば——わ、私を可愛いなんて平気で言うとは……。

赤くなっているであろう顔を隠すためにアルヴィンに殴りかかるが、あっさりと避けられた。

「はは…、そう照れるなよ。お前も女の子だからな。そういう気持ちがあってもおかしくないさ」

「だから違うと…」

私の羞恥を知ってか知らずか——アルヴィンはしばらくの間、私の攻撃を避けた。

結局、数分のいざこざで精神的に疲れた私は、ベッドに俯せで倒れると、枕に顔を埋めていた。

「おいおい…拗ねるなよ」

「…うるさい」

アルヴィンは、私のベッドに背を預けて座り込んでいる。かなり激しい動きをした筈なのに、この男、息一つ乱していない。

まあ、私も乱してはいないのだけれど。

「…それで、質問の答えは？」

私が顔を上げながら言うと、アルヴィンは、んゝ、と考える仕種をした後、こちらを向いて優しげに目を細めて笑った。

「一言で言えば“変な奴”だな」

「なんだ…それ」

「そのまんまの意味だよ」

「……………」

私は再び枕に顔を埋めながら溜め息をついた。
アルヴィンは笑いながら私の頭を何度か撫でる。

「ついでに、意外と女の子らしいなって思ったよ」

「——っ!？」

私は顔が熱くなるのを感じ、それを振り払うかの様に右手でナイフを抜くと、枕の隣に突き刺した。

ザクッ、という布や中の綿を裂く音が聞こえたが、気にせずは何回も突き刺した。その度に、ザクッ、ザクッ、という音がする。頭に置かれたアルヴィンの手が一瞬、びくり、としたが気にしない。いつまで頭を撫でるのか、と思いもしたが、何気ないその動作が何故か心地よく、私はしばらくそのまま何も言わなかった。



あの後、私は結局、自分の事を言い出せないままイル・ファンへと到着。

アルヴィンは情報を集めに出掛け、私は宿屋で帰りを待つことになった。

窓から外を眺めながら小さく息を吐く。

この街はシャン・ドウと比べると、だいぶ発展した街だと思う。街灯もあるし、建物もきちんとした鉄筋制であり、精霊術を使っただ様な製品が売られている。

シャン・ドウが部族的な印象を受けるならば、イル・ファンは機械的…もしくは現代的、と言えはいいのだろうか。

私の前世の世界に限りなく近いと言える。

そう思った時、ふっ、と一瞬だけ街から明かりが消えた。それと同時に感じる巨大な気配。

四つの巨大な精霊の力を伴って、大きな反応が一つ……。間違いない。これが精霊の主、マクスウェルだろう。

しかし、私は下手に動かずに、アルヴィンが帰るのを待つ事にした。

このまま外に飛び出して、マクスウェルと鉢合わせになった挙句に戦闘にでもなったら洒落にならない。

できるだけ気配を殺しながら、私はカーテンの隙間から街の様子を見る。

絶えず行き交う人々を眺めつつ、私はその時まで待つ。

しかし、なぜだろう……。嫌な予感しかない。

こう言うとなんだが、私の予感によく当たる。

それが良い事にしろ悪い事にしろ、私にはあまり関係がないと思っっているが、今回ばかりはどうしようかと悩む。

そんな感じで悩んでいると、突然、研究所らしき場所から爆発音の様な音が聞こえた。

同時に四つの精霊の気配も完全に消える。

「——嫌な予感によく当たるわね」

そう呟きながら、私は宿屋を飛び出した。



がやがやと野次馬が集まる港へとやって来た私は、手頃な出店の屋根に飛び乗ると、騒ぎの中心に目を向ける。

そこには倒れている赤い鎧の兵士が数名と、それを治療している術者が一人。

その向こうには正に今、出発した船が見えた。

目を懲らせば、甲板にアルヴィンと、一束だけ跳ねた髪型の金髪の女性、そして黒髪黒服の少年の姿が見えた。

兵士達が必死に船を止めようとするが、船は止まらずにどんどん遠ざかる。

私は袖のしたから隠していた小さい投擲用のナイフを取り出すと、全力で船へと投げた。

少女の体をしていても、私の中身は精霊だ。

ナイフは丁度、アルヴィンの近くに刺さる。

アルヴィンはナイフに気付くと、私の方に顔を向ける。白い袖だからすぐに気付いたようだ。

両手を合わせて謝る様な姿を見せたので、とりあえずサムズアップする。

安心した顔になるアルヴィンにそのまま腕を半回転。親指を下にして横に思いつきり引いた。

顔を青くするアルヴィンを乗せた船が出港するのを見送りながら、とりあえず次に会ったらどうしてやろうかを考えながら、私はその場を後にするのだった。



『スキット』

「アルヴィンの忘れ物」

アル「……はあ」

ミラ「どうしたのだ、アルヴィン？ 先程から溜め息ばかりだな」

アル「おっと、ミラ様か。脅かさないでくれ」

ミラ「堂々と近付いたのに気づかないお前が悪い。…それで、先程の問いには答えてくれないのか？」

アル「ああ…いや、たいした事じゃないんだ。ちょっとイル・ファンに忘れ物があつてさ……」

ミラ「ふむ、忘れ物か。大切な物なのか？」

アル「まあ……一応はな。でもまあ、大丈夫だろ。あいつならすぐ

に追い掛けてくるだろうし…」

ミラ「……？ お前の忘れ物とは、動物なのか？」

アル「ああ……寂しがりな兔ちゃんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913x/>

テイルズオブエクシリア～死神伝記～

2011年10月31日15時27分発行